pp. 1–19

原著論文

これって社会的アフォーダンスなのか？

社会的な場が提供する行為の可能性

発行：2024 年 3 月 31 日

南 博文（筑紫女学園大学）
大谷 直紀（合同会社こっから，本屋アルゼンチン）
青山 慶（岩手大学教育学部）

抄　録

本研究は，第 34 回日本発達心理学会において開かれたシンポジウム「社会的アフォーダンス—アカデミアと実社会との対話に向けて」での話題提供と討論を踏まえて，事後に継続していった共同的な思考を，アマチュアリズムの立場から再構成したものである。組織開発を主事業とするベンチャー企業の現場から，対話型のワークショップのファシリテーションの中で，参加者を取り巻く環境として，座の様式，レイアウト，間合いなどの「現場の生態学」と呼べる条件を提供することが有効であり，これらを「社会的アフォーダンス」と呼べるのではないか，との仮説が提案された。一方，生態心理学者，ギブソンの研究でこれまで注目されてこなかったアイデアとして，「エンカウンター」論があり，そこでは「もの」ではなくイベント（出来事）の単位に着目し，特定のイベントへの接触や予期的な制御に着目する視点があったことが紹介された。社会的アフォーダンスは，イベントの持続を左右する場の条件であること，「わからなさ」という限界的な状況の「縁」で発生する可能性，さらに制度との関わりについて疑問が提示され，この議論そのものがその限界点にあるという問題の再帰性が浮上した。

キーワード：社会的アフォーダンス，社会的な場，イベント，
エンカウンター，アマチュアリズム

連絡先：南 博文（E-mail: minami.hirofumi@gmail.com）

pp. 1–19

Original Articles

Could This Be Social Affordance?

Occasion for Possible Actions Provided by Social Fields

Published: March 31, 2024

Hirofumi Minami (Chikushi Jogakuen Women's University)
Naoki Oya (Kokkara, LLC. & Books Argentina)
Kei Aoyama (Faculty of Education, Iwate University)

Abstract

This study aims at reconstructing the collective thinking developed in the symposium entitled "Social affordance: Toward a dialogue between the academia and real world" held at the 34th Annual Meeting of the Japanese Society of Developmental Psychology from the standpoint of amateurism. The first point was presented from the actual field of a venture company specialized in the organization development where a set of insights arose regarding the surrounding environments such as seating arrangement, layout and the timing of responsive conversation functioning as "field ecology" in the facilitation of dialogue-type workshops: such set of facilitating conditions could be called "social affordance." The second point shed a new spotlight to the study on "encounter" in the later work of J. J. Gibson, and revealed that the unit of "event" not of a physical "thing" constitutes significant focus where the approach to a particular event is regulated in a predictive manner. Social affordance is considered as 1) the conditions embedded in the social field that regulate the continuation of the ongoing events, 2) the occasions in which the movement of the situation points to the "edge" of uncertainty, 3) being related with the institutional aspects, and finally 4) reflective construct over this argument itself.

keywords: social affordance, social field, event, encounter, amateurism

Correspondence concerning this article should be sent to:
Hirofumi Minami (E-mail: minami.hirofumi@gmail.com)

0．アマチュアリズム宣言

これはプロの研究者のために書かれた論考ではありません。各々の現場で，日々のルーチンに流されることに飽き足らず，ちょっと違った「ものの見方」を試みようとする，探究心を持ったアマチュアに向けて書いています。

発端は，2023 年 3 月 4 日に，大阪府茨木市にある立命館大学大阪いばらきキャンパスで行われた第 34 回日本発達心理学会大会でのシンポジウム「社会的アフォーダンス—アカデミアと実社会との対話に向けて」で交わされた議論と，その日の夜，駅前にある居酒屋で継続された談論風発のおしゃべりにあります。

シンポジウム本体の中では，議論が十分に展開しきれなかったという思いがあり，しかしそれこそが今回の主題である「社会的アフォーダンス」という言葉が向かって行こうとしていた現場への目線であるだろうと考え，紙・画面という面の上で想像上のシンポジウム続編を提示します。

アマチュアこそが大胆にものを考え，言える立場にあるのだ，とわれわれは考えます。学問にしろ，ビジネスにしろ，行政にしろ，専門として「やり過ぎる」と頭が硬直化してかえってそれが本来果たすべき本質を見失ってしまう。黒澤明の名画『生きる』の主人公のように，役場の書類の山から一歩外に出て，公園のブランコに乗ってみることで，人がどんなことを求めているのか，当たり前の世界の風景に出会うのだ。心理学にしても，それを本職とする研究者が「こころ」を専売特許のように自分たちで独占するのは，大いなる勘違いである。そこを崩さないと，リアリティのある心理学は世の中に出ていかないのではないか。そんなことを考えます。

比較するのはおこがましいでしょうが，フロイトやヴィゴツキーも心理学に関してはアマチュアだったはずです。前者は，医学を修め，神経生理の実験をやったのち町医者として開業した医学畑の人であったし，後者は，シェークスピアについて卒業論文を書いた後，法学などを経由して障がいをもつ子ども達の教育に従事することから心理学の研究を始めています。20 世紀を代表する哲学者，ウィトゲンシュタインにしても，航空工学を専攻した人でした。その彼が晩年に達した理解によれば，言語ゲームという形で，言葉はわれわれ全てに開かれています。

「アフォーダンス」という用語は，プロの研究者の独占資本ではないはずです。どこでどのように使われるか，それぞれの持ち場の中での必然と機会に乗じて，創造的に使っていけばよい。ただし，これまでその用語が被ってきた「使用の歴史」の連続性は踏まえながら。

ある用語を発話空間の中に置くことによって，これまで見えていなかった，あるいは知覚されていなかった世界の一端が見えてくるとしたら，それは言葉による知覚行為の可能性の切り拓き，すなわちアフォーダンスであると言えるのではないでしょうか。正統派のギブソニアン（J. J. Gibson の教えを継承する人々）からしたら過剰拡張と叱られそうな「アフォーダンス」の使い方ですが，本稿ではあえてこの語の使用限界の「縁」の向こうを覗いてみたいと思います。

青山慶氏を除いて，みなさんそれぞれギブソン派の研究に関しては，アマチュアの立場に居る人たちがこのシンポジウムに参加しました。視覚的断崖の先を初めて覗き込む，エレノア・ギブソンの実験の赤ん坊のように，恐る恐る，でもその内には大胆に，自分の足下にある〈奥行き〉の空間に乗り込んでいく。そんな初めて世界の淵を見る眼と精神で，アマチュアとして，社会的アフォーダンスについて語っていこうと思います。

以後，シンポジウムの話題提供の順番どおりに，論を進めていきます。当日行われたスピーチの再現ではありません。紙面・画面という場において，共同的に達成できたと考える「社会的アフォーダンス」をめぐる思考の展開とその限界の縁を新たに言葉と図で解き起こしてみよう

としています。

なお，ここから先は「です，ます」スタイルではなく，「である」文体でいきます。シンポジウムという場に相応しかった語りの調子ではなく，論考の調子で表現したいと思います。

1．どこで社会的アフォーダンスを考えてきたのか

1.1　内発性を起点としての組織開発／人材開発支援

合同会社こっから（以下，Kokkara）は組織開発を主事業とした 2016 年設立のベンチャー企業である。他事業として，米国ミネルバ大学を運営するミネルバプロジェクト社との社会人向けリーダーシッププログラム「Managing Complexity」の共同展開事業，本を使用したラーニングプログラムを提供する書店「本屋アルゼンチン」の運営などがある。主事業である「組織開発」の現場で企業から寄せられる相談の大半は，従業員をコントロールする管理型マネジメントに限界を感じ，「従業員の自律性にあふれた組織を作るにはどうすればいいか」という壮大なテーマが多い。このテーマに至る背景には複雑性が進む顧客課題やリモートワークの普及など多数考えられるが，とにかく企業は生き残りを意図し，従業員一人一人が当事者意識に溢れ，自ら顧客ニーズを徹底的に考え抜き，時には自社の慣習を破壊してでもイノベーション創発を起こすような自律型組織を理想とする企業が増えているのである。まず，このような課題状況に対応することが，われわれの「組織開発／人材開発支援」の現場のリアリティである。

上記のニーズに対して，組織開発を実践する企業は大きく二つの手法を用いる。一つは診断型組織開発である。診断型組織開発では，変革は計画・管理できることを前提に，自律型組織を目指した組織変革プロセスを作る。外部のコンサルタントが合理的かつ分析的なプロセスを用いて組織を診断し，問題点を特定，改善するアプローチである。通常，組織開発と呼ばれるコンサルティング企業群が用いる手法はこのタイプであると言ってよいだろう。

一方，Kokkara が主に採用している手法は，対話型組織開発（ブッシュ & マーシャク 2018）である。マインドセット（暗黙の信念や態度）と組織にいる人々の考え方の変容に焦点をあて，「真実」は置かれている組織内に内在しており，環境を含めた状況によって「現実」が生まれるという立場をとる。そのため，変化は主に組織の成員ひとりひとりの質的な変化，つまり認知とマインドセット自体の変容がもっとも重要という前提を置いて，組織が本来の自律性を取り戻すためのプロセスをデザインしている。それが対話型組織開発の原理であると考えている。

この対話型組織開発の考え方に則り，自発性が生成される場である「ワークショップ」の設計・企画・運営・ファシリテーション・振り返りまでの一連の流れを各企業の文脈に応じてカスタマイズし、その過程において発注側企業と事務局を立ち上げて並走するのが Kokkara のスタイルである。取り扱うテーマや企業の文化，参加者のバックグラウンドも含め，当然だが一度として同じ場は生まれない。この場を起こすために，事前のインタビュー，ワークショップの案内での言葉使い，タイミング，場所，席の配置，様々な条件を想定して場の準備を行う。

以上，Kokkara が活動を行う現場がどのようなものであるか，行為者の目線から概略を説明した。では，そこで基本的に採用されている「考え方」はどのようなものなのか，あらためて言語化してみることにする。

（信念 1）もともとクライエントにある可能性を解放する立場をとり続ける

組織開発を行う企業は，実際に提供するサー

ビス（具体的にはコンサルテーションやワークショップの提供）以前に，そもそも人間に対しての考え方，つまり人間観が問われる。大袈裟かもしれないが，この考え方がサービスメニューや会社の運営に大きく影響するのである。

さらに人間の理想と現実には常にギャップが存在し，その間を埋めるための活動を行い続けることによって理想に近づくことができるという考え方がある（「ギャップアプローチ」と呼んでおく）。ギャップアプローチは現代社会全体に存在するゲームのルールを遵守している企業には相性がよい。つまり，自分の足りないところを明確にして，それをどのように計画的に埋めていくのかを明示し，その活動を埋めていく先述した診断型組織開発のアプローチを取る企業はこの人間観を共有していると言える。

一方で，すでに人間にはエネルギーや創造性があるが，社会的な抑圧やルールによって蓋をされているという考え方がある（「ポジティブアプローチ」と呼んでおく）。この考え方を共有している経営陣もしくは経営者は，人の可能性をどのように解放していくかに頭を悩ます。それはサーベイやアンケートで問題点を見つけ改善していくプロセスに加え，やはり一人一人が自分自身を見つめ，行動の信念や動機を自ら気づき，その行動と会社の方向性を自分なりにどのように重ね合わせるかを，自覚することがもっとも重要だと考える。他者からの介入によって，人がモチベーションを上げることをそこまで重要視していないのである。

なぜそのような想定をとるかと言えば，前提として社会で働くとさまざまな不条理や不合理が存在し，思い通りにならないことが多いという事実性がある。その中で，どのように組織に属しながら，自分の大事にしている動機を仕事で表現していくのか。これは働く我々にとっても悩みの種でもある。そこには明確な解が存在するわけではないが，組織開発ではこのテーマを一人ではなく組織の仲間と共にワークショップを通じて探求するのである。その際，上述したように〈もともとクライエントにある可能性を解放する立場をとり続ける〉という信念をもつことが，現場的には有効であると考える。

1.2　部外者でも課題解決者でもなく，問題の中に居る当事者であるという視野に立つこと—Level 3 のリーダーシップがなぜ大切か

Kokkara が行うワークショップで用いられている手法とその背景にある考えの第 2 の観点として，リーダーシップの問題を取り上げる。

ワークショップの場は緊張感が場を支配していることが多い。自分が信じて行っている仕事や組織作りに対して，ワークショップが開催される時点で，「あなたもしくはあなたの職場には問題があるので変化してください」というメッセージを参加者側はメタ的に受け取っている。

業務に追われる中で，メンバーのマネジメントや次から次への重なるタスクを保留し，貴重な時間をこの場に捧げることによって，本当に組織が自律的に動き始めるのか，現場を知らない人事や外部コンサルタントに一体何ができるのかなど，疑義が生まれてくる。このような気持ちになることは想像に難くない。

この想像に対して，普段とは異なる変化を起こすためにはどのような場のセットが必要なのか。テーマの設定粒度，事前に参加者の方々にどのように案内文を届けるのか。当日の非日常空間を演出するために，限られた制約条件の中，リミナリティ（境界的な状態のこと；文化人類学者，ターナー，V. の用語；サトウ（2024）は、これを「移境態」と和訳することを提唱している）に留まってもらえるようにさまざまな仕掛けと意図を編み込んでいくのである。この時に，もっとも重要なのは診断型組織開発ではなく，対話型組織開発のスタンスを貫くことである。実際に行う行為としては，問題の特定などを行うが，スタンスとしては対話型組織開発の姿勢を一貫して持ち続ける。これは人類学の参与と

観察の使い分けと質的には似ているかもしれないが，常に診断的に捉えながらも，対話型で参加者同士の対話の中で変容が起こっていくことを信じ続ける必要がある。

ここで，ファシリテーターが場に参加している人々は自分たちで対話の中で変容することができると信じ続けるだけで本当に変化が起こるのかという疑問が起きるかもしれない。たしかに，そこには何かをインプットすれば，場がこのように変化するという方程式があるわけではない。一人一人の参加者が場で起こっていることの読み取り，話しやすいタイミングや立ち位置がたまたま重なった時に手を挙げて本音を持ち出すという行為が現れてくる。これを機械論的な予測モデル，例えばレヴィンの $B = f(P \cdot E)$ の方程式を文字通りに受け取って，変数に分解して整理しようとすること自体が診断的なアプローチの過度なケースになってしまう。現場は，そのように予測的には扱えない変動と変化の起きる場である。ここでは，場を読み，声のトーンから何から何まで，環境づくりにファシリテーターはコミットするしかない。そのように振る舞うことが現場実践で重要であることを我々ファシリテーターは，肌感覚で知っている。

「コミット」の仕方について，リーダーシップのあり方との関係で，次のような原則論を採用している。

リーダーシップのスタイルとして 3 つのレベルを置いて考えている。ここでレベル 1 は傍観者。つまり，目の前の事象を自らの存在と切り離し，とくに介入せずに問題があっても笑い話として扱うスタンスである。旨みは全く傷付かず，自分の居心地のよい状態をキープできる点である。一方で代償は，このまま現実は変わらず続いていくという現実である。

次にレベル 2 は，課題解決者と呼ばれる。これは，自分自身が問題に対し，積極的に解決アプローチを取る場合である。仮想例として，組織における若手の元気がない課題があるとする。その原因を分析し，必要なアプローチは特定する。例えば，若手は飲み会においてベテランのアドバイスを聴く姿勢がないことが問題と設定し，その解決方法として飲み会のお作法を訓練する勉強会を開催する。短期的には機能するケースもあるかもしれないが，あくまでこれは課題を自分とは関係なく起こっていることと設定し，その解決策に一生懸命外側からアプローチする場合である。ここでの旨みは自分が介入していることへの効力感や一時的に感謝される他者からの承認があるだろう。代償は，解決する側と解決される側の分断がこの行為によって生まれてくることである。

レベル 3 は源（真の主体者）と呼ばれるスタンスである。問題は自分の外側に発生しているのではなく，自分もその問題を引き起こしているシステムの一部であり，問題を担っている可能性をまずは引き受けるスタンスである。これには旨み・代償はない。レベル 1 や 2 のように問う側に居るのではなく，自分自身が問題の可能性があるため，そもそも問題を解決するのではなく，自分自身がそのことを引き受けた上で行動するのである。先ほどの若手の元気のなさという問題の一部に自分という存在が関わっている可能性がある。そのことをまず認めた上で，自分には何ができるのか，自分はどうしたいと思っているのか，問題の内側で探っていく。

従って，組織開発の現場において，次のような想定を持って現場に関わっていると言える。

（信念 2）組織に変化をもたらすには，レベル 3 のリーダーシップ，すなわち自分自身を問題を構成するシステムの一部とみなす立場で関与することが有効である

組織の課題に関わっている当事者が常にレベル 3 でいるのは非常に困難を伴う。しかし，組織が変容を求めているとき，また，このようにワークショップを外部に依頼する必要があるときには，問題が極めて複雑であり，シンプルな問題を診断して突き止められる状態にないケース

が多い。人間は複雑性を孕んでおり，企業活動のようにゴールとモチベーションが明確であっても，負の感情に支配された時は取るべき行動をわざと避けたり，「がんばっても無駄」などの信念から，一生懸命頑張ることをやめる，むしろ一生懸命頑張っている人の足を引っ張るなどの行為も誘発してしまう。こうした前提が，組織への関わりを進める際のわれわれの現場心理学である。その真偽，妥当性は学術的な裏づけを持つものではないが，あえて言語化すれば，上記した事柄が少なくとも「仮説」として行為者を支える原理であると言うことはできる。

1.3 人類学・環境心理学との出会いから開けた場についての理解

ワークショップの実践において，人類学および環境心理学からの示唆を取り込んで行っている活動の領域がある。人が他の人と対面して話をするという人類に普遍的な状況がそれである。

本音で何かを交換するときに，教室のレイアウトで縦横一列にそろっているレイアウトで組織の本音を語り始めるシーンを想像してほしい。表情が見えないことによって，自分の言いたいことを言えるように受け取る人ももちろんいるだろう。しかし，そこには相手がどのようなトーンで言っているのか，そもそもその場のダイナミズムは相互に言葉が浸透していくことが重要であるなか，やはり表情なども含めて認知しにくいだろう。この聞き手の認知しにくさが，結果的に話し手の話しにくさにもつながる。また，ファシリテーターが壇上に立った瞬間にフラットさは無くなり，立ち位置によって教える側と教えられる側になってしまう。自律型組織を作りたい企業にとって，このレイアウトを弾いている時点で，メッセージとの一致感が損なわれるのである。

では，どうするか。以下では，私たち自身が行っている実践とその背後にあると考えられる思考法を列挙する。

(1) できるだけフラットに車座になって座ることが重要である（図 1)。こうなった瞬間に，普段の直線的なレイアウトではない円を組むことによって普段とのモードの違いを自己創出しやすくなる。しかも誰が話しても顔が見えているため，その場に居る者にある程度コミットメントも要求しているのである。

(2) 現場ではさまざまなことが起こる。レイアウトは行うコンテンツやテーマ設定以上に重要な可能性もある。実際に，組織同士でなかなか本音が話せない方々が，自然に囲まれた環境にいくと，なぜか普段とは違うモードになる。そのため，スーツは禁止，可能な限り私服でくることも事前の案内文にいれることも多い。

(3) グループサイズも重要である。特定トピックをいきなり場に投げ込むと意見が出てこないことが多い。まずは小グループにして，相互に

図 1　ワークショップ時の周囲環境の配置（レイアウト）の例

意見交換を行ったのちに，全体の場で意見を改めて問う場合もある。

（4）間合いも重要な要素である。（3）で述べていることと矛盾するが，テーマによっては全員で問いを投げたのち，意見が出ない時間を「あえて」待つ場合もある。活発に意見が交換されていることよりも，問いに対して誰も反応できない時間を全員で保留する。この保留の時間は，普段間をとることに慣れていない参加者には大きなストレスが生まれる。しかし，話しやすいトピックばかりではなく，話しにくいトピックにこそ組織の変容のチャンスが隠れていると場の状況を読む必要があるのだ。

以上のような環境のセッティングをわれわれ主催者側は準備する。実際の場では，ひとつひとつの準備に解釈をしている参加者は少ないが，その場に身を置くことで少しずつ場の意図を環境からピックアップしている。これが変化をアフォードしているとも言えるのかもしれない。対話的変化を起こす場や人のアフォーダンスは存在するのだろうか。当事者としては，決定的に現場で即興的に，感じながら場をデザインしている。もちろん頭を使って，何がどうなるから，どの問いを出すなどは考えている。しかし，それ以上にファシリテーターも参加者も環境を勝手に読み取っていて変化や本音の交換が起こっているようにみえる。つまり，どれだけ変化をしてくださいと言われるよりも，車座になって，海のほのかな匂いがして，あたり一面は新緑の木々，そして動物の囀りが遠くに聞こえる環境で普段は無機質なビルの中で働いている仲間と車座になってゆっくり話す。そこでは社会的なアフォーダンスが発生している—このように考えることは可能であると思われる。

そこにおいて決定的に大切だと直感的に理解されている「現場の生態学」とでも呼ぶべき経験的な法則が存在するように思える。その一部は，例えば生態心理学の知見を人類学のフィールドワークから得られた狩猟採集民達の「つくる（making)」作業で起きている環境との対話の中に再発見するインゴルド（2017，2021）の示す方向の中に見出される。あるいは，人と人との「あいだ」に起きる空間の取り方（spacing）を観察や実験を通して解明した環境心理学者，ソマー（1972）の「個人空間（personal space)、人類学者、ホール（1970）の「プロクセミクス（接近学)」の知見や，その背景にあったレヴィンの集団力学（1979）に淵源を見い出せる。これら学問領域のいくつかの知見を編み合わせることで，「現場の生態学」を構築できるかも知れない。しかし，それはまだ模索の只中にある。その限定条件を踏まえた上で，このような理解の仕方を命題化してみる。

（信念 3）人が他の人と居合わせるとき，本音で語り合えるような関係が生まれるには，その人達の空間的な座のあり方とそれを取り囲む環境の条件・配置・レイアウトが効力をもつ

1.4　わからなさとの遭遇（エンカウンター）— UNLEARN することがなぜビジネスの世界で必要か

組織が変化していくときに重要なのは，自分自身がこれまで行ってきたこと，その前提にある認知の枠組み，価値観，信念などを揺るがすことである-- -そのような仮説を持ってこれまで Kokkara での実践を行っている。枠組みが変わらない中で，「これまでよりも自律的になろう！」というポスターを壁にはっても変容は起きないのである。枠組み自体に変化を起こす。そのためには，その成員であるひとりひとりの言葉を変える。文脈を変える。その言葉や文脈を作っている前提の自分の物事の見方を一度ほぐしていく必要がある。組織変容だけでなく，これからのリーダーは自分がわかることだけをジャッジするのではなく，わからないところで自分の認識の枠組みを「器」に取り込み，広げて

いく必要がある。それがつまり，器が広がるということでもあるだろう。では，大人になってこの器を広げるにはどうすればいいのだろうか。

自分に足りない知識や能力を増やすのは器自体の変容にはならない。それはコップにさらに新たなスキルをいれていっているだけである。そもそも器が小さければ，新たなスキルは入り切らないと考える。そのためには自分の信じている勝ちパターンが「そうではないかもしれない」というわからなさを体験することでしか変化は起こせないのではないだろうか。Learning Agility（知的謙虚さ）の重要性は米国ミネルバのリーダーシッププログラムでも言及されているが，ビジネスの世界では，まさにこのわからなさを見ないようにするのではなく，経験からわからなさを自分なりにピックアップし，その対象を探求する力とも言える。これは一種のアブダクション（仮説的推論）である。そのような仮定（この対象が自分にはわからないかもしれない）を置いて，現実の動きを見ていくと，それが先に置いた仮定と合致しているように思える。つまり，後づけ的に「そうではない（＝自分の勝ちパターンが常に正しいわけではない）」という見解が支持される。そのとき「なるほど」という納得感が得られる。

（信念 4）ビジネスにおいて個人あるいは集団の「器量」が増大するのは，わからない事を「わからなさ」として体験し，これまでの自己のパターンが妥当ではないかもしれない，という信念のゆらぎが生じるときである

では，それをどのような「経験」の連続（流れ）によって実現するかが問題となる。組織で変容を起こすためには，事前の綿密な準備を経て，「ワークショップ」を実施する。ワークショップはファシリテーターと参加者，そこを取り囲む環境で構成され，一つのトピックを掲げ，様々なアクティビティを実施する。アクティビティはファシリテーターが事前に準備したものを行うが，その後リフレクションのパートで先ほど行ったアクティビティを通じて自分がどのように感じたのかを全員でシェアを繰り返す。重要なのは他者の感じ方を通じて受け取り，自分が保有している認識自体を疑い，悩みの種が生まれ，自分自身の経験値で形作られた無意識の前提に自分で気づいていくことである。ここにグループのダイナミクスが生まれる。一人一人の意識は異なり，発する言葉や使い慣れている言葉も様々である。人間の知覚を最大限発揮し，ひとりの微妙な仕草や表情を観察しながら，自分が思ったことを場に投げかけていく。この対話中に参加者は，環境（そこには他参加者・ファシリテーターも含む）を知覚し続けながら，潜在的に場の動きから「何をすることができるのか」を感受している。「私たちはこの環境で何を，どう変化するのか」という情報を全員で読み合っているようなものである。

もっとも場が動くのは，ファシリテーターからの投げかけではなく，参加者が自分の枠組み自体を疑った事実を口にする時である。参加者は普段とは異なる環境になりはじめたことを全身でうけとりはじめ，時には防衛的に，時には開放的に，変化しようとしている自分を見つめる。さらに重ねるように他参加者仲間がともに場を過ごし，この防衛と開放の呼吸を同じように行なっている息遣いが聞こえてくる。いや，体全体で感じていく。話すトピックを無理やり操るのは容易だが，このトピックよりも場で本当に自分達が扱うべきテーマを深堀るためには仲間との距離，目に入る姿，語り合う時のグループサイズ，物理的な位置関係はトピックよりも重要とさえ言える。

そのために，環境をいかに準備できるかが重要になる。物理空間，事前の案内文の届き方，当日の服装，BGM，昼食，これらの経験自体をワークショップ前からどのようにこだわれるか。ただし，過度なデザインは「変化の強要」をうむ。このデザインという言葉と Kokkara がおこなうワークショップとの相性の悪さはこの辺り

に潜む。この事実を踏まえた上で，準備を行えるかどうかが重要である。

そこで問題になるのが，「内側からの理解」という方略である。ワークショップの主催者としては，上に書いたような構えと想定を持ちながら場の設えと当日の進行を準備し，実行していく。そこでは行為しつつ，参加者の様子を観察し，ファシリテーターとしてそこで起きている「場の生態」をキャッチしながら，次への手立てを繰り出す。その際に心がけているのは，一種の仮説生成的な状況の読み取りである。同様なことは，参加者たち自身も行っているであろう。このようなワークショップの場において起きていることは，人間が生きている日常の何気ない行動や儀礼的な関わりにおいて，作用している「環境からの提供性」，すなわち場が「アフォードしていること」であると言えないか。

これを「社会的アフォーダンス」と呼んでいいのか。このような現場の生態学において作動されている行為と知覚の循環の実際を実社会の人にどう伝えるか。そこで起きている事を「内側からの理解」に基づいて詳細に記述していくならば，そこから「ビジネスの現場でのエスノグラフィー」とでも言える研究活動が立ち上がっていきそうであるが，それは学術的な成果になるのだろうか。

こうした疑問を携えて，私自身の「わからなさとの遭遇」体験の一端を，皆さんと共有した。

2．ギブソンが最晩年に考えていたこと —「エンカウンター」論

続いて登壇した青山慶からは「社会的なことの知覚と行動の場」というタイトルで発表が行われた。当日の話題提供は，ギブソンの生態心理学の鍵概念である「表面」ということで語ろうとしていたことは何か，という問いから始まった。その例示として，ベビーカーに乗った赤ちゃんから見える世界を，移動する赤ちゃんを取り囲む表面という観点で再現する映像が流された。そこに含まれる，「流れ行く表面」「ずっと一定の距離に留まる表面」「逸れる表面（e.g., すれ違う人）」「迫りくる表面（e.g., エレベーター，店）」「遠ざかる表面（e.g., 家，電車）」という赤ちゃんがずっと経験し続ける肌理が，これらの表面によってエンカウンター（遭遇）される生態環境の現れとして捉えられることが示された。それらの表面の類別の中で，迫りくる表面は，言わば赤ちゃんにとって「未来」の環境であり，遠ざかる表面は，「過去」の環境であるというのがギブソン的な世界の把握方法であることが述べられた。

以下は，このようなギブソンの生態心理学の中でこれまで必ずしも明示されて来なかった「エンカウンター」という事象について，青山自身によって発表後に書き下ろしされたテキストである。

ギブソンと「エンカウンター」

ギブソン以降の生態心理学の中心人物のひとりであり，晩年のギブソンを知るビル・メイスによると，最晩年のギブソンは「エンカウンター」の概念を発展させようとしていたという（野中 2014）。ここではまず，ギブソンが構想していたエンカウンターについて，残されたメモをもとに整理してみたい（ギブソン 2015；青山 2015）。そして，このエンカウンターの概念が，これまでのアフォーダンス理論が踏み出すことに躊躇してきたような領域，いわゆる社会的と呼ばれる領域へのステップとなることを示唆したいと思う。

メイスによると，ギブソンが発展させようとしたエンカウンターという概念は「それは，動物があるものと対峙して起こるような，広く一般的な探索というよりももっとエピソード的な，現時点で参与している特定のイベントに対する気づき（awareness）のようなこと」だという。まず注意したいことは，ここで問題にしていることは「もの」と対峙して起こる一般的な探索では

ないという点である。アフォーダンスという用語が用いられるとき，確かにイスのアフォーダンス，ドアのアフォーダンス，コップのアフォーダンスなど，ある「もの」について論じられてきたという印象がある。しかし，ここでは何かしらの個物に出会い，探索する場面のようなことは問題とされていない。

それではエンカウンターの概念が問題にしようとしているのは何か。それは，「イベント」すなわち出来事だということである。イベントには，始まりがあり終わりがある。誰もが周りを見渡せば，テレビ番組が流れていたり，食事中であったり，誰かと SMS で会話していたりと進行中のイベントがいくつも見つけられるだろう。こうしたイベントは，それぞれの人がどこで何をしているのかという状況に依存していて，地球上の誰しもが等しく同じイベントに取り囲まれていたりはしない。さらにその中のいくつかは，その人が参加しているイベントである。いま歩いている人を想定するなら，その人はどこかから歩き始めてどこかで歩き終えるだろう。歩き始めた場所が出発地点であり，歩き終える場所が目的地である。この歩くイベントは入れ子になっていて，信号から信号への一区画の歩行もイベントで，家から電車に乗り込むまでの歩行もイベントで，また自宅を出て自宅へ帰るまでの歩行全体も外出というひとつのイベントである。それ以外にも，前から歩いてくる人が近づいてくること，同じ方向に歩いている人が遠ざかること，目の前を誰かが横切ることなどがあり，また同時にお腹が空いていくこと，日が昇るにつれて気温が少しずつ上昇していくこと，目的の駅に隣駅から電車が向かってきていることなどイベントは挙げればきりがない。これらの進行しつつあるイベントの終わりは，当の本人にとって有益であったり有害であったりする。前から歩いてくる人がそのままのコースを行けば衝突するかもしれない，人混みで一緒に歩いている親が離れていけば迷子になるかもしれない，お腹が空いていくままにすれば餓死しないまでも倒れるかもしれないし，暖かくなれば快適だが過剰になれば熱中症になるかもしれず，駅に到着する電車に乗れば遠くまで行けるがこのままの速度で歩いていたら電車に乗り遅れてしまうかもしれない。そのようにしてイベントが進行する中で環境とのエンカウンターは生じる。

ギブソンは，この進行中であり参加して（しまって）いるイベントにおいてこそ「自発的行動」が出現すると指摘する。目的地への経路から外れすぎない範囲で，すれ違う人とぶつからないように，同行者とはぐれないように一歩一歩を調整すること。レストランに着く頃にはある程度空腹になるよう，かといって途中で耐えがたいほど空腹になりすぎないように適切なタイミングで適切なエネルギーを補給すること。暑くなれば水分補給をしたり上着を脱いだりすることなど。動物の自発的行動とは，進行中のイベントがこのまま進行すれば迎えるだろう結末をコントロール（制御）しようとするものである。多くの場合に自覚できるほど意識に上らないかもしれないが，進行しているイベントへの気づきは，そのイベントを制御しようとする行動となって現れる。行動とは，環境とのエンカウンターを制御しようとするものである。

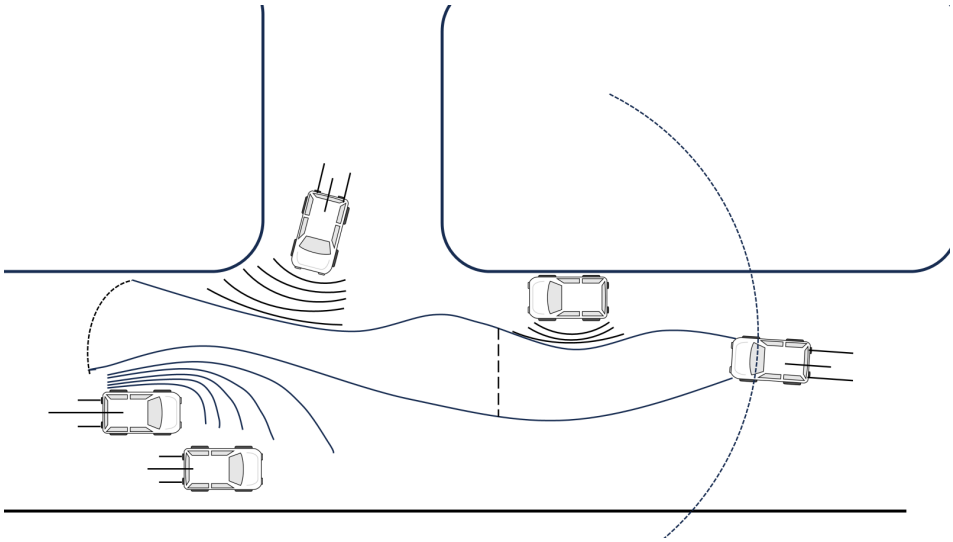
ここで指摘しておきたいのは，ギブソンがその最後の著書の大半を費やして論じていた包囲光配列にある光学的情報は，こうしたイベントが直接知覚可能であることの根拠となっているという点である。そして，イベントの進行を直接知覚することは，その結末の知覚（予知覚）が可能であることを含意する。つまり，イベントがこのまま進めばどうなるのか，私たちは知覚することができ，そこに行動が現れる。ギブソンの視覚論は，わたしたちがそれぞれ勝手気ままにイメージしたり想像したりする未来に向けて行動するのではなく，周囲で進行するイベントを特定する情報に基づいて知覚されるリアルな未来にむけて，それを制御するために行動していることを主張する。そのような行動による試みのすべてが成功するわけではないが，行動

は知覚と行為の循環の中で，そのようなリアリティをもって現れ，しばしば成功するのである。当たり前といえば当たり前の話ではあるが，心理学が向かっていた（いる？）方向性は，この当たり前ではなかったようにも思われる。

さて，「もの」の探索ではなく「イベント」について問題にするエンカウンターの概念において，環境との接触の仕方や形式が極めて重要となる。ある表面と接触することがどのようなことをもたらすのかは，接触の仕方を抜きには語れない。他者の手との激しい接触は殴打だが，社会的な接触は握手かもしれないし，親愛の情のこもった接触もあれば性的な接触もある。漠然と手のアフォーダンスを挙げることは難しいが，実際に具現している接触・非接触の仕方の分類には可能性がある。われわれはかなり敏感に他者の手とのエンカウンターを感じ分け，自らの手と他者のエンカウンターを使い分けている。そして，進行するエンカウンターは，行動することによって，接触を早めたり遅くしたり，一定の距離を保ったり，かわしたり，受け流したり，遠のいたりすることができる。

実は，ギブソン自身，その研究経歴の初期から繰り返しこのエンカウンターの主題に出会っている。最初期の研究であるドライビングの研究（Gibson & Crooks 1938）は，エンカウンターの制御を問題にしようとしている。Gibson & Crooks（1938）によれば，運転することは自車の最短停止域を知覚し，安全運転フィールドに自車を送り込むことである（図 2）。衝突（負のアフォーダンス）を避け行きたい所に向かうよう，イベントを制御しようとする行動が運転となる。ただし，この印象的な図では，運転者の知覚を記しているわけではないことに注意したい。つまり，運転手の知覚は，このように俯瞰から安全運転フィールドを眺めるようなものではないだろう。必要なのは，結果として安全運転フィールドに車を送り込み続けるという行為を可能にする，運転者にとっての知覚を説明する理論である。ギブソニアンがその後発展させた視覚理論，特にタウ理論は，このドライビングの問題を抽象から情報の問題へと，行為者にとってのリアリティへと引き戻す。運転者を包囲する光の構造には，全体の流動として自らの動き

図 2　安全運転フィールドと最短停止域。右側から走行してきた自動車の前に実線で広がる領域が安全運転フィールドであり、その中間にある点線が最短停止域を示す。駐車車両、対向車両、合流車両からは、それぞれの動きの方向や速度によって決まる接触の可能性を示す曲線が広がっている。（Gibson and Crooks（1938）を元に作成）



を特定する情報があり，その中の部分的な流動として他のものの動きの情報があり，その部分の肌理の拡大率は衝突への切迫度合いの情報となる。運転者はそれらを利用することで，自らが何かとの衝突に向かったり，目的地ではない場所に向かっていたりするという望ましくないイベントの結末を予期し，衝突を避けながら自らを向かいたい方へと向かわせるよう行動する。ハンドルとアクセルとブレーキで光学的流動を制御することが，結果として安全フィールドへと自車を送り込むことになるのである。

アフォーダンスが個物に備わっているという理解は，ギブソン理論の限界について可能性を狭めてしまう。アフォーダンスは，エピソード的なイベントにおいて，そのイベントへの気づきとして膨大な接触の可能性を探る行動とともに具現している。そして，われわれが日々制御しようと試みているイベントの多くは，他者とともに参加しているものである。実際，膨大な接触のバリエーションは，他者とともに探られる。その一例を積み木遊びの観察で示したい。

図 3 は，母親が積み上げた積み木を，子が崩そうとする場面である。母親は，別のおもちゃで遊ぶ子から少し離れた位置に約 10 段の積み木を積む。ある程度積みあがった頃，別の向きを向いていた子が積み木のほうに向きなおり，立ち上がって歩き出す。すると母親は積み木越しに両手を出し，子の進行を阻もうとする。親子が積み木を挟んでしばし押し引きする間に，二人とも声を出して笑う。ついには子が振り払った手が積み木に当たり，積み木が崩れる。この積み木を崩す母子のやりとりが二人にとって可笑いことはどのように成立しているのだろうか。この母子が積み木を積んで崩すという行為の繰り返しを縦断的に観察してみると，その秘密が少し垣間見える（青山・佐々木・鈴木 2014）。

先の遊び場面の一年前に始まったこの積み木での遊びで母子のやり取りは，例えば次のようなものがあった。手や頭が強く衝突すると積んだ積木全体が崩れるが，弱い接触の場合は積み木

図 3　母親が積んだ積み木を崩そうとする子と，それを邪魔する母親。

を残したまま一部を掴み取ることができる。接触する強さにバリエーションがある。土台の積み木への接触は積み上げた積み木全体を崩すが，上方への接触では下方の積み木がそのまま残り，再利用が可能となる。接触する場所のバリエーションである。また，積み木を積む場所によって，子の体に近ければ偶然の接触で崩れるし，遠ければわざわざそちらに向かって行かなければ崩すことができない。身体と積む位置の関係にバリエーションがある。これらはどれもその間に多様で微妙な接触の可能性を含んでおり，またそれらの組み合わせとして毎回の接触が現れる。

母子は，多様な積み方と多様な崩し方（崩さないことを含む）が異なる結末をもたらすことを一年かけて探っていた。こうした接触のバリエーションは，ある一回の接触（非接触）の文脈となった。つまり，あえて崩れやすい積み木の上に人形を置き，そこで繊細な動きで受け渡しをする遊びをしたり，遊びの中で機嫌を損ねた子が，敢えて土台となっている積み木を強く払いのけることで繰り返していた積み崩し遊びを終了させたりした。あるいは，積み木を避けるように体をねじって別の遊びを継続することで，母親の積み木遊びへの誘いを拒んだ。この二人にとっては，異なる結果をもたらす多様な崩し（崩さない）の可能性を前提として，ある崩す方法／崩さない方法が選択されていることが

ここでは意味を持っていた。実際，積み木遊びをするかしないかにかかわらず，しばしば積み木は母子の傍らに積み上げられていた。おそらく最初に図3で示した事例では，長く接触のバリエーションを探ってきた二人にとって，刻一刻と異なる結末を予期させ，お互いがさらにその結末を制御しようと次々と行動を繰り出すところにハラハラする楽しみがあるのだろう。

接着もされずに積まれた積み木は，いつかは崩れるしかない。ある意味で，積み木を積むことは崩れることへと向かうイベントである。その崩れを避けるのか，早めるのか，遅くするのか。傍らに積み木が積まれるということは，エンカウンターへの気づきの場を提供していた。また，積み木との多様なエンカウンターの可能性が，一年以上にわたって積んで崩すという遊びを継続させる根拠を与えているように思われる。

以上が青山による「エンカウンター」論の書き下ろしテキストである。シンポジウム時の発表では，図3における社会的な場において，毎回の積み崩しに「このまま進行するとどうなるか」が垣間見え（予見され），その知覚された未来に対して行動する，という知覚と行為との循環系が成立することが述べられた。

ここで，「実在するのは何か？」という問いに対して，

- 可能性が実在する（進行中の出来事の成り行きは知覚可能）
- 可能性の限界は知覚不可能

という観点が示された。このような事象の「連続と不連続」との境界は，ギブソンの知覚論での「遮蔽と縁」の意義との関係で理解できると言う。つまり，遮蔽の向こう側は，出来事のゆらぎの中で，その連続の縁が知覚されるという形で経験に現れる。その縁は，「何があるか」ではなく，「ここと持続する何かがある」ことを特定する情報を提供する。

このようなアナロジーから，大谷の発表で提議された「わからないこと」「わからない本とのエンカウンター」という事象は，思考の連続性（考えるプロセス）における「縁」へ知覚者を引きずり込むような経験として捉えられる，という提案が青山よりなされた。「わからなさとの遭遇」とは，現在あなたはこんな進行の中に居るんですよ，という知覚し行為する行為者であることを本人自身にリマインドする（思い出させる）出来事であり，それはある種の気づきを生む経験であると言えるだろう。

概略，上のような2つの話題を「統合」する観点が示されたところで，指定討論に移った。

3．一万円札のアフォーダンスをどう考えるか

「アフォーダンス」概念に独自な視点としての新しさを認めつつも，同時にギブソニアンたちがこだわる「環境の実在」という主張に対しては，受け入れ難い，あるいは解釈が狭過ぎると感じる態度をシンポジウムの場でも，また夜の居酒屋談義でも熱く語ったのが，指定討論者として参加した麻生武であった。

ギブソンによればアフォーダンスは，人間の認識が生み出す観念的解釈ではなく，環境が生物に提供する実在する性質である。それは，アメンボが水面に見つけ出すように，このような身体でこのように水の表面に接すればその面上を移動することができるという，面に備わる行為の可能性であり，動物はそれを直接知覚している。つまり，認知の媒介を必要としない。これがギブソニアンの見解である。

麻生が，シンポジウムの壇上に持ち出したのは，自身の財布から取り出された一枚の一万円札であった。

> 「これで鼻を噛むことはできないし，机の上にこぼれたコップの水を吸い取ることも，まあ難しいですね。この紙には，そのようなアフォーダンスが乏しい。そこまではギブソ

ンも言うし，私も同じように知覚する。でも，われわれが生きている人間社会の中では，これはもっと違ったアフォーダンスを発揮する。」

一枚の紙から出来ている一万円札，もっと一般化した言い方をすれば「紙幣」のアフォーダンスというものを考えたとき，それは動物一般にとって実在する環境だけで捉えられない。ギブソンの主張する生態環境が実在するだけでなく，社会制度，流通システム，市場といった紙幣をとりまく「社会」は実在する。猫や赤ちゃんにとっては，これは硬めの紙と変わりないアフォーダンスしか持たないだろうが，社会制度という実在する環境において，一万円札は実に多くのことを可能にしてくれる。

ギブソンはこのような種類の「もの」について，あまり多くを語っていない（『視覚への生態学的アプローチ』の第 15 章で絵画について説明しているが，それも視覚的な awareness に限定した扱いである）。社会制度の中で力を発揮するような事物が，われわれの行為の中でどのようなはたらきを持つか，そこにもアフォーダンスという見方を適用していけるのか。[1)]

ギブソンが扱いきれていないこうした現象をわれわれはもっと見ていくべきではないか。知覚的な観点から，いろんなモノが奥行きを持っている。その場合，「奥行き」は必ずしも視覚経験に限られることではなく，経験において最初に出会う層と，さらに関わりと行為を深めて行ったときに出会う層とがある，という意味を含んでいる。たとえば，目の前の人が，思わぬアフォーダンスを持っていた，ということがある。第一発表者の大谷さんには，そのように人の持つ潜在的な可能性，アフォーダンスを見抜く眼力があるのだろう。

このような現象も，社会的アフォーダンスという概念でつかんでいくことができるのではないか。従来の心理学は，何でも個物の中の属性として，変数に押し込めようとする。一方，ビジネスパーソンも固定化したレッテルの中で，物事を見てしまう視野の狭隘さがある，と今日の大谷さんの話を聞いて同じような問題がそこにあることを知った。

ギブソンは，物体の物質的な側面でのアフォーダンスに限定して実験的な研究を進めてきたが，それでは狭い。もっと広げて，世界情勢や，社会に起きているさまざまな変化を，取り込んでいくようなアフォーダンス論が出てくるべきだと思う。

そこについては，誰も分からない，本人も分からないような，未知の領域がアフォーダンスに取り入れられ，生かされるべきだと思う。

以上のような檄とも言えるコメントが指定討論者の麻生から発せられてシンポジウムは全体討論に移った。

4．総合ディスカッション

この論考で扱っている主題である「社会的アフォーダンス」は，われわれにとって問題であるが，先の大谷の指摘にあったように（1.2），われわれ自身がすでにその問題の一部ともなっているような仕方で，自己言及的に遡行せざるを得ないような輻輳する系をなす。それは，シンポジウムという場がそもそも社会的アフォーダンスを備えた環境であることに端的に表れている。そこで起きる事は切れ目のない連続する出来事の流れにおいて，現に知覚され，その知覚から思考が触発され，次なる発言に繋がっていくという，本論で出てきた「エンカウンター」の連続として存在した。このような時空的な広がりをもった多元的な（複数の）アクターの経験の流

1） ここで指定討論者の麻生からは，氏の近著『6 歳と 3 歳のおまけシール騒動—贈与と交換の子ども経済学』（新曜社）（麻生 2023）で考察されているビックリマンシールに関わる，それが持ち主に発揮する力についての言及があった。議論の詳細の記録がなく，解説が不十分になるので，ここではその説明は割愛した。詳しくは同書を参照のこと。

れであるシンポジウムの場で起きたディスカッションを紙面上に定着することは不可能である。そこにはたくさんの「縁」と「遮蔽」とが折り合わされており，どの断面を切り取っても，そこからの「向こう」が垣間見えるだろう。

以下は，ややランダムな形式で，シンポジウム当日にあった発言の記録からの抜粋と，事後に書かれた論考とのモンタージュで，総合的な考察に充てる。

4.1　青山慶のリプライ及び反論

指定討論者の麻生から投げかけられた，社会制度，流通システム，市場といった紙幣をとりまく「社会」は実在するという話題について。この点に関しては，アフォーダンス理論，あるいはエンカウンターの議論からは，ビックリマンシールや一万円札を通して社会制度，流通システム，市場といった「社会」の実在と出会う，ということを考えたい。ビックリマンシールは，そのもの自体の物理的性質によるアフォーダンスが確かにある。袋に入れられること，シールとして貼れること，シートとして重ねられること，子どもでも複数枚を持ち運べることがある。また，一枚一枚に異なる文字や色を印刷することができる。子どもたちは，確かに一般的な探索を通してビックリマンシールのアフォーダンスと出会う。さらに子どもたちは，物としての性質だけではなく，一枚一枚の印刷の差異を知覚していくといったようにしてビックリマンシールを探索していく。

しかし，実際の子どもたちとビックリマンシールとのエンカウンターは，ビックリマンシールだけ取り出されての状況では生じない。子どもたちとビックリマンシールとの出会いは常に，その紙片への誰かの接触のバリエーションとともに生じる。ただのシールとして雑に扱かわれるかもしれない。汚れたり傷ついたりすることのないようそっと恭しく触れられるかもしれない。目の前にあっても一瞥されるだけで触れもしないかもしれない。それらは全てものとしてのシールの性質に支えられているが，それだけで説明しきれるものではない。一万円札も同様で，普段触れることもないような重要なものとして扱われることもあれば，時世の変化によっては周囲を照らすために火をつける者が現れることもあるだろう。人々は，こうした接触のバリエーションとその変遷に，社会制度や市場と呼ばれるものの現状や変化を知覚する。もしかすると，社会制度や市場などが直接知覚されることはなく，人々のエンカウンターの制御だけを知覚し，制度や市場や社会をそこから抽象するのかもしれない。

いずれにしてもアフォーダンスに関連する研究の多くが「ものとの一般的な探索」に重点を置いてきたことは確かである。その点では，晩年のギブソンが企てていたように，人々の接触の多様性にあらわれるエンカウンターについての研究を発展させていくことで，現時点ではあえて「社会的」アフォーダンスと呼ばざるを得ない領域を，「社会的／非社会的」に二分しないアフォーダンスの実在論として展開していけるのではないかと期待している。

4.2　社会的か否かで分類することの困難さ

以上のように青山は，「社会的／非社会的」に二分しないアフォーダンスの実在論を説く。麻生から投げられた「一万円札のアフォーダンス」問題は，ここでは「人々の接触の多様性にあらわれるエンカウンター」という切り口で実証的に（つまり，観察可能な事象に落として）研究可能な問題となる。ここで鍵を握っているのは，「もの」のアフォーダンスを対象化するのではなく，「イベント（出来事）」とのエンカウンターを扱うという事象単位の変更である。たとえば，自動車の運転（ドライビング）行為において起きている知覚と行為の循環での「気づき」の推移が，

「衝突」というイベントを避けるように制御されているというギブソンの説明から，それが社会的か否かを問うこと，その分類を行うことは有益でないことは理解できる。車道からはみ出ないことや，信号機に自車をぶつけないことは，社会制度と切り離せない配慮ではあるが，その行為と知覚の連続のどこからが「もの」的であり，どこからが「社会制度的」かは，区分が難しい。それらは出来事の連続性の中に置かれた，何かとのエンカウンターである。あるいは，ある種のエンカウンターを避けようとする行為の調整である。

例えば，この発表の現場となったシンポジウムの冒頭で第一著者は，企画趣旨を話した。それが予定された時間をオーバーしてまだ続いていきそうな「イベント」の見えを示した時，そのイベントの推移・連続に対して，司会者のサトウは，周囲に見えるような動作でマイクに近づいて声を発して「そろそろ話題提供に移る」ことを促した。「未来の予見」と簡単に呼ばれる事柄は，出来事の知覚において「このまま進行するとどうなるかが垣間見える」というギブソンの「エンカウンター」論として青山が提示した，衝突を避けるドライビング行為と同等な環境とのエンカウンターの調整であると言える。

4.3 大谷直紀の懸念：「広げるとマズいんじゃないか」

シンポジウムにおいて，大谷は，先に 4 つの信念として整理した組織開発の現場で用いているファシリテーターとしての構えについて，それらの行為調整を「社会的アフォーダンス」に関わる事象として見ていきたいと思うと述べながらも，「社会的アフォーダンスという言葉をどこまで広げて使っていいのか，広げるとマズいんじゃないか」という懸念を表明している。この懸念に呼応して，青山も，もし議論が「それはアフォーダンスである」で終わってしまうとしたら，「それは最悪だ」と繋いだ。そこから議論が連続していくことが大切なのであると。青山のこの発言は，4.1 で示された「イベント」を連続していく過程における行為調整の分岐点として，ある行為を取ることがその先に開ける特定のゾーンへの連続を引き起こす，というイベント展開の制御の考えから一貫している。

ある事象を取り上げて，それが「社会的アフォーダンスである」と言うことでは何も明らかにならない。そこからどのような議論が連続するかが大事なことである。その点では，今展開しつつあるこの論考を書く行為そのものが，議論の連続であり，それを引き起こしたイベントの分岐点が，「社会的アフォーダンスということを言ってもいいんじゃないか。でも広げるとマズいんじゃないか，とも思う」という大谷によって示された懸念を含んだ発言にあったとも言える。

シンポジウム本体の中で，この疑問とそこからの議論はそれほど発展しなかった。「それほど」とは内容的な意味でも，また議論という行為の連続という面でも，発話とそこで展開する思考の連鎖が長く続かなかったという点での形容である。麻生の「一万円札のアフォーダンス」問題はまだ片づいていない。青山が事例として示した積み木を崩す子どもの行為と同様に，「社会的アフォーダンスはある」という前提で進めてきた議論の積み木は，「社会的／非社会的」というカテゴリー区分そのものが無効である，という青山の一撃で崩されたかのように見える。しかしながら，ここでも青山の事例の展開と同じく，崩された積み木をまた積み上げ始めるかのような行為が，その「崩される」イベントに続いて起きている。

だとしたら，これは大谷が自身の組織開発の実践の中から発見した「わからなさとの遭遇」という個人と集団の「器」を増大させる転換点が，この「社会的アフォーダンスって言っていいのか」という疑問にあると言えないか。

だから，この論考は振り出しに戻って，タイト

ルを「これって社会的アフォーダンスなのか？」とした。副題の「社会的な場が提供する行為の可能性」は，あくまでも暫定的に「社会的アフォーダンス」を定義したものである。

疑問が起きたのが，実在する組織開発のワークショップの現場という「社会的な場」であったことと，そこで起きる「（読んでいる本の内容が）わからない」という発言がきっかけになって次の行為が触発され，それがワークショップへの関与を連続させていく原動力になるという観察に基づいている。社会的な場に居て，「わからん」が起きることが，それまでに続いたイベント（出来事）の「縁」であり，そこでイベントが終了することもあれば，そこからまた次の積み木を組み直すような行為が起き，あらたな景観が開けてくる場合もある。その分岐を左右するものが「社会的アフォーダンス」ではないか。ここで「社会的」とは，個人に閉じていない，相互行為によって支えられた共同性の領域として立ち上がる次元を意味する。青山の示した積み木遊びの場面がすでにそれを例示していた。「崩す」行為がおもしろいのは，そこに注視してくれる他者が居るからである。それだけでなく，その行為の場が連続し，ミクロな歴史を積み上げていたからでもあった。その積み重ねの連続の中で，イベント展開に「縁」を生じさせ，その先にある「これまで遮蔽されていた光景」が垣間見えるような時，行為の場が緊張度を増す。その縁のような行為の可能性が，アフォードされること，そのようなイベントの生起を指して「社会的アフォーダンス」と言うのならば，それはこのシンポジウムで大谷の疑問が発していた「？」のアクションに備わっていたものではないだろうか。

引用文献

青山慶（2015）“エンカウンター”を読む—不可避な未来の知覚，その制御としての行動．生態心理学研究，*8*（1），29–32. https://doi.org/10.24807/jep.8.1_29

青山慶・佐々木正人・鈴木健太郎（2014）他者の意図理解の発達を支える環境の記述—母子によって繰り返される積み木遊びに注目して．認知科学，*21*（1），125–140. https://doi.org/10.11225/jcss.21.125

麻生武（2023）6 歳と 3 歳のおまけシール騒動—贈与と交換の子ども経済学．新曜社.

Bushe, G. R., & Marshak, R. J. (2015) *Dialogic organization development: The theory and practice of transformational change.* Berret-Koehler Publishers.（ブッシュ，G. ・マーシャク，R. 中村和彦（訳）（2018）対話型組織開発—その理論的系譜と実践．英治出版）

ギブソン, J. 青山慶（訳）（2015）エンカウンターに関する覚書．生態心理学研究，*8*（1），24–28. https://doi.org/10.24807/jep.8.1_24

Gibson, J. J. & Crooks, L. E. (1938) A theoretical field-analysis of automobile-driving. *The American Journal of Psychology*, *51*, 453 – -471. https://doi.org/10.2307/1416145

Hall, E.T. (1966) *The hidden dimension.* The Doubleday Company, Ltd..（ホール，E. T. 日高敏隆（訳）（1970）隠れた次元．みすず書房）

Ingold, T.（2013）*Making: Anthropology, archaeology, art and architecture.* Routledge.（インゴルド, T. 金子遊・水野友美子（訳）（2017）メイキング—人類学・考古学・芸術・建築．左右社）

Ingold, T. (2011) *Being alive: Essays on movement, knowledge and description.* Routledge.（インゴルド, T. 柳澤田美・柴田崇・野中哲士・佐古仁志・原島大輔・青山慶（訳）（2021）生きていること—動く，知る，記述する．左右社）

Lewin, K. （1951) Field theory in social science: Selected theoretical papers. Edited by Dorwin Cartwright, Harpers.（レヴィン，K. 猪股佐登留（訳）（1979）社会科学における場の

理論．誠信書房）

野中哲士（2014）*The Ecological Approach to Visual Perception* 執筆の舞台裏—William M. Mace 氏インタビュー．生態心理学研究，*7*（1），13–17．https://doi.org/10.24807/jep.7.1_13

サトウタツヤ（2024）月刊ラヂヲで心理学論（41）における発言（2024 年 2 月 21 日取得 https://www.youtube.com/watch?v=KyGTxnBWEu4）

Sommer, R.（1969）*Personal space: The behavioral basis of design.* Englewood Cliffs, NJ/Prentice-Hall.（ソマー，R. 穐山貞登（訳）（1972）人間の空間—デザインの行動的研究．鹿島出版会）

■謝辞

本論考の元となった日本発達心理学会第 34 回大会，シンポジウムにおいて指定討論者としてご参加いただきました麻生武氏，および共同企画者・司会として参加いただきましたサトウタツヤ氏には，学会当日の議論とその後のメール交信におきまして対話的な協力をいただきましたことを記して感謝いたします。但し，論文の表記・表現に関しては十分に反映できていないこと，執筆内容については著者たちに責任がありますことを記しておきます。

編集・制作協力：特定非営利活動法人 ratik

https://ratik.org

ratik